市川九女八

長谷川時雨

一

若い女が、キャッと声を立てて、バタバタと、草履(ぞうり)を蹴(け)とばして、楽屋の入口の間へ駈(か)けこんだが、身を縮めて壁にくっついていると、

「どうしたんだ、見っともねえ。」

部屋のあるじは苦々(にがにが)しげにいった。渋い、透(とお)った声だ。

奈落の暗闇(くらやみ)で、男に抱きつかれたといったら、も一度此処(ここ)でも、肝(きも)を冷されるほど叱(しか)られるにきまっているから、弟子(でし)娘は乳房(ちぶさ)を抱(かか)えて、息を殺している。

「しょうがねえ奴らだな。じてえ、お前たちが、ばかな真似（まね）をされるように、呆（ぼん）やりしてるからだ。」

舞台と平時（ふだん）との区別もなく白く塗りたてて、芸に色気が出ないで、ただの時は、いやに色っぽい、女役者の悪いところだけ真似るのを嫌（いや）がっている九女八（くめはち）は、銀のべの煙管（キセル）をおいて、鏡台へむかったが、小むずかしい顔をしている渋面が鏡に写ったので、ふと、口をつぐんだ。

七十になる彼女は、中幕（なかまく）の所作事（しょさごと）「浅妻船（あさづまぶね）」の若い女に扮（ふん）そうとしているところだった。

「お師匠さん、ごめんなすって下さい。華紅（かこう）さんが、

他(よそ)のお弟子さんと間違えられたのですよ。」
「静(しい)ちゃん、その娘(こ)に、ばかな目に逢わないように、言いきかせておくれよ。」
九女八は、襟白粉(えりおしろい)の刷毛(はけ)を、手伝いに来てくれた、鏡のなかにうつる静枝にいった。根岸の家にも一緒にいる内弟子の静枝は、他のものとちがって並々の器量(うつわ)でないことを知っているので、
「静(しい)ちゃん、あすこの引抜きを、今日は巧(うま)くやっておくれ。引きぬきなんざ、一度覚えればコツはおんなじだ。自分が演(や)るときもそうだよ。」
静枝は——後に藤蔭(ふじかげ)流の家元(いえもと)となるだけに、身にし

みて年をとった師匠の舞台の世話を見ている。
名人と呼ばれ、女団十郎と呼ばれ、九代目市川団十郎の、たった一人の女弟子で、九女八という名をもらっている師匠が、歌舞伎座のような大舞台を踏まずに、この立派な芸を、小芝居や、素人まじりの改良文士劇や、女役者の一座の中で衰えさせてしまうのかと、その人の芸が惜くって、静枝は思わず涙ぐんだ。
鏡へうつる眼のなかのうるみを、見られまいとしてうつむくとたんに、九女八づきの狂言方、藤台助が入口の暖簾を頭でわけてぬっと室へはいって来た。
「どうしたんだ、叱られでもしたのか。」

そういうのへ、九女八は審（いぶか）しそうに顔を向けた。静枝へいっているのではないと思ったからだった。

「ははア、からかったのはお前さんか。」

九女八は、若い女（もの）へ調戯（からかい）たがる台助のくせを知っているので、口へは出さないが、腹の中でそう思っている。

「師匠、この次興行、浅草へ出てくれないかというのだが――」

静枝は、台助の顔を、睨（にら）むつもりではなかったが、そう見えるほど厳しく下から見上げた。今もいま、師匠のかけがえのない好（い）い芸を、心の中で惜んでいたの

に、このお爺（じい）さんは見世（みせ）ものの中へ出すのか――と思ったからだ。

「なんだ。二人とも、妙な面（つら）あするんだな。」

座頭（ざがしら）へむかって、仮にも、狂言方が、そんな、いけぞんざいな言葉がいえるはずはないのだが、台助は九女八の夫で、しかも、九女八に惚（ほ）れ込んで、大問屋の旦那が、家も子も女房も捨て、小芝居の楽屋へ転（ころ）がり込んだという、前身が贔屓（ひいき）筋ではあるし、今も守住（もりずみ）さんで通っている亭主だったのだ。

「考えておきましょうよ。」

女房の九女八は、女団洲（だんしゅう）で通る素帳面（きちょうめん）な、楽屋でも

家庭（うち）でも、芸一方の、言葉つきは男のようだが、気質のさっぱりした、書や画をよくした、教養のある人柄だった。

馴（な）れてるとはいいながら、九女八の扮装は手早かった。水刷毛（みずばけ）をすると、眉（まゆ）は墨をチョンと打って指で引っぱる。唇（くちびる）の紅は、ちょいとつけて墨をさして、すッと吸っておくばかりだ。

それでもう、生々（いきいき）した娘の顔になっている。子供のときから、御狂言師で叩（たた）き込んでいるので踊のおさらいのような、けばけばしい鏡台前ではなかった。筆は一本兎（うさぎ）の足が一ツという簡素さだ。お茶とかき餅（もち）が

すきなので、それだけは、いつも傍(かたわ)らにある。
「桂(かつら)がさきへ帰るからね、晩御飯に、さんま食べるって——浅漬(あさづけ)もとっといておくれ。」
湯呑(ゆの)みと手鏡を持って、舞台裏まで附いてゆく静枝にいいつけた。

根岸の家(うち)は茶座敷などもあって、庭一ぱいの鷺草(さぎそう)が、夏のはじめには水のように這(は)う、青い庭へ、白い小花を飛ばしていた。
そんな日の午前(あさ)、紫の竜紋(りゅうもん)の袷(あわせ)の被衣(ひふ)を脱いで、茶筌(ちゃせん)のさきを二ツに割っただけの、鬘下地(かつらしたじ)に結(ゆ)った、

面長（おもなが）な、下ぶくれの、品の好い彼女は、好い恰好（かっこう）をした、高い鼻をうつむけて、そのころ趣味をもった、サビタや、メションや琥珀（こはく）のパイプを、並べて磨いている。

　養女の菊子に、台助が、意味をもった眼づかいをして、何か小用を、甘ッたるく言いつけているのを後にきいて、軽く眉をひそめていたが、台助が外出した気配にホッとしたようで、

「静枝さんは、依田（よだ）先生のところへいったかい。」

「ええ、丁度、今帰りました。坂本の栄泉堂（おかの）へお菓子を買いにいったら、帰りが一緒になりましたの。」

と、内弟子の華代子（かよこ）が、餅菓子を好い陶器（やきもの）の鉢（はち）へ入れて持って来ていった。

　二人の内弟子のうち、華代子は他のものにはきらわれたが気に入りなので、師匠の小間使いをしている。静枝には海老茶袴（えびちゃばかま）をはかせて玄関番をさせ、神田小川町の依田百川（ひゃくせん）——学海（がくかい）翁のところへ漢学をならわせにやるのだった。

「女役者だって、学問があって、絵が描けなければだめだよ。」

　彼女も、用がなければ、サビタのパイプを弄（いじ）る前には、絵筆を捻（ひね）っているのだった。

けれど彼女に、守住月華（げっか）という雅号のような名があるのは、絵を描くためではなくって、明治十一年ごろからはじまった、演劇改良会の流れで、演劇改良論者の仲間であった学海が、明治廿四年浅草公園裏の吾妻（あづま）座（後の宮戸座）で、伊井蓉峰（いいようほう）をはじめ男女合同学生演劇済美館の旗上げをした時、芳町（よしちょう）の芸妓米八（よねはち）には千歳米波（ちとせべいは）と名乗らせた時分だったか、もすこし後（あと）で、川上貞奴（さだやっこ）を援助（たすけ）に出た時だかに、彼女にも守住の本姓に月華という名を与えたのだった。

岩井粂八（くめはち）といった時分の弟子には、紀久八（きくはち）たちがあるが、月華になってからは、かつらとか、名古屋の源

氏節から来た女にも、華紅（かこう）とか、華代子とかいう名をつけた。新しい弟子の静枝も、学海居士（こじ）が名づけたのだった。

彼女は、好物な甘いもので、苦（にが）いお茶を飲んで、閑（しず）かな日が、気持ちよげだった。

「こんやは一ツ、静（しい）ちゃんに『舌出し三番』でも教えるか。」

といったが、古い日のことを思出したのであろう、お前の踊の師匠だった、おとねさんは、しどいよ、と言った。

おとねさんという名をきくと、静枝は故郷の新潟（にいがた）の

花柳界（さかりば）を思いだした。静枝の踊の師匠は、市川の名取りで、九代目団十郎の妹のお成（なる）さんという浅草聖天町（しょうてんちょう）にいた人の弟子だった。

「そういえば、お師匠さんが新潟へお出（いで）になった時、あたしはまだ小（ち）っぽけでした。お揃（そろ）いの浴衣（ゆかた）を着て、川蒸気船の着く、万代（ばんだい）橋の川っぱたまで、お迎えに出ていましたっけ。」

「うん、そんなこともあったっけね。」

九女八は凝（じっ）と、庭の鷺草を見つめた。

新潟の花街（さかりば）で名うての、庄内屋の養女だった静枝までが、船着き場へ迎いに並んだほど、九女八の乗り込

みは人気があったのだが、それも、会津屋おあいといった芸妓が、市川流の踊りの師匠で、市川とねと名のっていたから、同門の誼みで、華々しく迎えたのだった。

土地の顔役で、江戸生れのお爺さん、江戸鮨の孫娘に生れた静枝は、直江津までしか汽車のなかった時分の、偉い女役者が乗込んで来た日の幼かった自分の事も、あの、日本海の荒海から流れ込んでくる、万代橋の下の水の色とともに目にうかべ、思い出していた。

「出しものは道成寺だ。勧進帳を出したのは、興行師らから、断わりきれない頼みだったんだ。そのこたあ、おとねだって知ってたのに。」

それがもとで、市川升之丞(ますのじょう)の名を取り上げられ、九代目団十郎から破門され、また岩井粂八の名にかえって、暫(しばら)く蟄伏(ちっぷく)しなければならなかった、嫌な思出と、若かった日のことなども、それからそれへと、九女八も思いうかべている。

「お師匠さんは、新潟へ入(い)らしった時から、九女八だったとばっかり思ってました。あたし、ちいさい時でしたから。」

「市川升之丞さ。」

九女八は、莨(タバコ)の脂(やに)の流れた筋が、飴(あめ)色に透通(すきとお)るようになった、琥珀(こはく)のパイプを透(すか)して眺めて、

「あたしは、一番はじめの、踊の名取りが阪東桂八(ばんどうけいはち)さ。それから、女役者になって岩井粂八、それから市川升之丞、守住月華、市川九女八さ。」

随分とりかえたものさねと、自分のことではないような、淡々としたふうにいって、

「だが、師匠運は、ばかに好いのさ。阪東三津江(みつえ)というお狂言師は、永木(えいき)三津五郎という名人の弟子で、まあ、ちょっとない名人だよ、高名なものさ。岩井半四郎は、大杜若(おおとじゃく)と呼ばれた人の孫だったかで、好い容貌(きりょう)の女形(おやま)だった。けれど、なんといったって、市川宗家(つきじ)ほどの役者の、門弟(でし)になったなあ、あたしの名誉さ。」

ほんとに、団十郎の芸には心酔している言いぶりだった。

「好い先生といえば、ねえ、お師匠さん、依田先生が、和歌も学んだ方が好いから、竹柏園（ちくはくえん）に通ったらどうだと仰しゃって、入門のことを話しといてあげると仰しゃいました。」

「そりゃあ豪儀だな。」

ふくみ笑いを、ほんとに笑ってしまって、

「学問は上達しても、踊が、あれじゃあなってねえな。お前（めえ）たちのは、踊ってるんじゃなくて、畳を嘗（な）めてるんだ。」

機嫌の好い皮肉だった。

「あっしゃ全体、神田の豊島町で生れたんだけれど、牛込の赤城下に住んでたのさ。お父さんはお組役人——幕末の小役人なんざ貧乏だよ。赤城神社の境内に阪東三江八ってお踊の師匠さんがあってね、赤城さまへ遊びにゆくと、三江八さんのところの格子につかまって覗いてばかりいたのさ。」

呼びこまれて踊ってみると、見覚えで踊れた。それから親には内密で教えてくれたのだが、お母さんが肩を入れだして、どうかお父さんに許されるようにと、何かの祝事のあった時、父親やその仲間のいるとこ

ろで本式に踊らして見せたので、その後、直に父親を歿(なく)なしてからも、十三、四から踊りの手ほどきをして、母親と二人で暮していけたのだがと、めずらしく身の上ばなしをしだした。

「お文(ぶん)さんという、常磐津(ときわず)の地で、地弾(じび)きをしてくれる人が、あたしを可愛がってね。小石川伝通院(でんづういん)にいた、高名な三津江師匠のところへ連れてってくれたのだが芸は怖(こわ)い。」

と彼女はふと息を吐いた。

「それまで、あたしが踊ってたのは、手ふりさ、踊りなんかじゃないのさ。それから、本当の踊りをしこま

れた。」

「そういえばお師匠さん、高橋お伝をおやんなさったことがあるでしょ。」

「ああ、たしか明治十七年ごろだった。」

「いいえ、もっとあとで、見た人が、お伝になった、お師匠（しょ）さんの扮装（おつくり）を見て、お師匠（しょ）さんの若い時分——年増（としま）ぶりを見た気がしたって、言ってました。」

「あッしゃあ、あんなじゃなかったよ。」

苦りきったかげが唇をかすめたが、湯呑（ゆのみ）の銀の蓋（ふた）をとって、お茶を飲んでしまった。

「もっとも、あの着附（きつけ）は、あの時分の年増の気のきい

た好みさ。だが、あッしばかりじゃない。全体、あの『綴合於伝仮名書（とじあわせおでんのかながき）』というのは、いつだったかねえ、お伝の所刑（しょけい）は九年ごろだったから——十一、二年ごろに菊五郎（ごだいめ）が河竹黙阿弥（かわたけもくあみ）さんに書下（かきおろ）してもらって、そうそう裁判所のところが大詰（おおづめ）に出るので、大道具長谷川勘兵衛（かんべい）さんと、裁判所まで行ったんだよ。なんでも、その時の話に、おでんという女（ひと）は伝法（でんぽう）な毒婦じゃなくって、野暮（やぼ）な、克明な女だから、そういうふうに演（や）るっていったことだが——そうかも知れないね。お伝は、上州沼田というところの御家老の落し種で、利根（とね）の方の農家（おひゃくしょう）のところで生れたのだそうだか

ら。」

「でも、お師匠(しょ)さん、すこし根下りの大丸髷(おおまるまげ)に、水色鹿(が)の子(こ)の手柄で、鼈甲(べっこう)の櫛(くし)が眼に残っていますって——黒っぽい透綾(すきや)の着物に、腹合せの帯、襟裏(えりうら)も水浅黄(みずあさぎ)でしたってね。そうだ、帯上げもおなじ色だったので、大粒な、珊瑚珠(さんごじゅ)の金簪(きんかんざし)が眼についたって。」

朝、目が覚めて、蚊帳(かや)から出た時に、薄暗い庭の植込みに、大輪な紫陽花(あじさい)の花を見出すと、その時の九女八のおでんが浮びあがるといったことや、それは、浅草蔵前(くらまえ)の宿で、病夫浪之助を殺して表へ出た時の着附(きつけ)だったか、捕(つか)まる時のだか、そんなことはもう、朧(おぼろ)げ

になってしまっていたのを、はなした。
「お師匠さんは、あんな役、厭(きら)いなんでしょ。」
「まあね、いって見れば、あたしは、女団洲と呼ばれたくらいだし、自分でも、団十郎(くだいめ)のすることの方が好きだから――わかりもしないくせに、高尚ぶってるといわれたりしたけれど、もともとお狂言師は、生世話物(きぜわもの)をやらなかったからねえ。それが癖になって、新世話物(ざんぎり)に行けなかったのかも知れない。」
――けど、おかしいわ、ちっと――
そうそう、新入門の、とし子さんならば、そうハキハキと問えるかもしれない、と考えながら、静枝は、

「でも――それでも、お師匠さんは、もっと新らしい、書生芝居にもお出なすったのでしょう。」
九女八は、理窟を言う、静枝のみずみずした丸い顔を見て、
「あたしは、こんな、小さな柄だけれど、毛剃だの、熊谷の陣屋だの、あんなものが好き。山姥なんぞも団十郎のいきで、彫刻のように刻りあげてゆきたい方だが、野田安さんて、松駒連の幹事さんで芝居に夢中な人が、川上さんのお貞さんを助けて出ろと、なんといってもきかないのでね、芸は修業だから出もしたし、それに文士方の新史劇の方は、――史劇は団十郎も気を

入れていたのだもの。」

彼女はふと気を代えていった。

「お前さんも、あんな、抱えの 芸妓衆（げいしゃしゅう）や、娼妓（おいらん）が、何十人いるうちの、踊舞台だって、あんな大きなのがある、庄内屋さんの家督娘（あととり）に貰（もら）われてて、よくよく芸が好きなればこそ、家を飛出してあたしんとこなんぞの、内弟子になってるんだから、よく覚えてくれなけりゃあ、しようがない。」

そら、お談議になったと、静枝がかしこまって、閉口（へいこう）しかけているところへ、

「今日（きょう）、お髪（ぐし）、お染めになりますか。」

と、風呂(ふろ)の支度をする女中がききに来たので、静枝は、
やれ助かったとホッとした。

二

——降り出した雨。

ト、舞台は車軸を流すような豪雨となり、折から山中の夕暗(ゆうやみ)、だんまり模様よろしくあって引っぱり、九女八役(くめはちやく)は、花道七三(しちさん)に菰(こも)をかぶって丸くなる。それぞれの見得(みえ)、幕引くと、九女八起上り合方(あいかた)よろしくあって、揚幕(あげまく)へ入る——

蚊のなくように、何時（いつ）、どこで、なんの役でかの、狂言本読みの、立（たて）作者が読んできかす、ある役の引っこみの個処（ところ）が、頭の奥の方で、その当時聴いた声のままで繰返してきこえる。それについて、その役の、引っ込みの足どりまで、九女八は眼の前の、庭の雨を眺めながら、考えるともなく考えているのだった。

——はて、この役は、女だったかな、男だったかな——

ながい舞台生活は、華やかなようでも、演（や）る役は、普通生活とおなじで、そうそう他種類はない。自分についた持役（もちやく）は大概きまっていて、柄にない役はもって

こないのだが、どうしたことか、今考えている役がなんだか、九女八には思いだせない、それに、なんでも思い出さなければならないことでもない。と、そう思うかげに、ながい間役者をしたが、とうとう、団十郎（ししょう）と一つ舞台に並べなかったという、何時も悲しむさびしさが、心の奥を去来していた。

「あたしは、考えかたが、間違ってた。」

九女八は、鷺草の、白い花がポツポツと咲き残るのへ降る雨が、庭面（にわも）を、真っ青に見せて、もやもやと、青い影が漂うようなのに、凝（きっ）と心をひかれながら、呟（つぶや）いた。

「なにがよ。」

芸者や、役者の配り手拭(てぬぐい)の、柄の好いのばかりで拵(こしら)えた手拭浴衣を着て、八反(はったん)の平(ひら)ぐけを前でしめて、寝ころんだまま、耳にかんぜよりを突ッこんでいた台助が、腑(ふ)におちない顔をした。

「なんてって――」

九女八は、まだ、素足(すあし)の引っこみの足どりの幻影(かげ)を、庭の、雨足のなかに追いながら、

「成田屋(ししょう)のうちの庭は、あすこらあたりに、大きな、低い、捨石があったっけが――」

と、自分でも思いがけない、話の本筋とは違うことを、

ふいと、口に浮び出したままいった。
「お殁なんなすってからも、居間の庭は、当時そのままだから――」
九女八は、一木一石といったふうの団十郎の家の庭に、鷺草が、今日も、この雨に、しっとりと濡れているだろう風情を、思うのだった。
台助は、なんとなく顔をあげて、庭もせから、部屋の中を見廻した。其処には、自分の趣味なんぞ半欠けらもなかった。九女八の好みであり、それは、彼女が私淑した成田屋好みである、書画、骨董、それら、人格に深みを添えるたしなみが、女役者の住居とは思わ

せなかった。
「高田先生（早苗《さなえ》）は、あたしを女のままで、女役にして、団十郎《ししょう》の相手を演《や》らせてくださろうとなさったのだったと、はじめて――始めて、わたしは気がついた。」
九女八の唇は細かくふるえている。ちらりと、それを、台助は見ないのではないが、
「今更おそい――か。おくれたりだなあ。」
同情しながら、わざというのかもしれないが、おひゃらかしたふうにもとれた。が、九女八はそれにはかまわず、

「師匠の芸の神髄を摑(つか)んだ、と思ったのは真似(まね)だけだったのか――師匠は、女団洲なんて、嫌(いや)だったろうなあ。」

「だってお前(めえ)、団十郎(なりたや)だって、高田さんにそういったってじゃねえか、九女八(あれ)が男だと、対手(あいて)にして好い役者だって――だから、お前が、女に生れたってことが、師匠(くだいめ)といっしょに演(や)れなかったということなんで、生れかわらなきゃ、頭から駄目だったのだ。」

「そうじゃありませんよ、静枝やとし子さんの考えを見ても、川上さんや、依田先生たちのことを思い出しても、あたしは、毛剃(けそり)や、弁慶が巧(うま)かったのがいけな

かった。」
「高田先生は、そのつもりだったのかも知れないが、宗家(そうけ)はそうじゃなかろうぜ。」
「あたしを女優——女形(おやま)として、相手にはしなかったろうとですか？」
「そうじゃないか、彼女(あれ)は立派な役者(もの)だ。男だったら、俺(おれ)の相手だがと、だから、高田先生(せんせい)に言ったんだ。」
「いいえ。」
九女八はしみじみとして、
「あたしがねえ、小芝居ばかりに出ていたので、どうかして、あれを止(や)めねえものかと仰しゃってたそうだ

から――」

緞帳（どんちょう）芝居――小芝居へ落ちていた役者（もの）は、大劇場出身者で、名題役者（なだいやくしゃ）でも、帰り新参となって三階の相中部屋（あいちゅうべや）に入れこみで鏡台を並べさせ、相中並の役を与え、慥（たし）か三場処ほど謹慎しなければ、もとの位置にはもどさない仕来（しきた）りがある、階級的な差別の厳しいのが芝居道だった。

九女八は、下谷（したや）佐竹ッ原（ぱら）の浄るり座や、麻布（あざぶ）森元（もりもと）の開盛座（かいせいざ）を廻り、四谷（よつや）の桐座（きりざ）や、本所（ほんじょ）の寿座が出来て、格の好い中劇場へ出るようになるかと思うと、また、神田の三崎町（みさきちょう）の三崎座に女役者の座頭（ざがしら）になってしまっ

たりする。その上に、勧進帳のことで破門されたりして、九代目に芸を認めてもらえながら、引上げてもらう機運をはずしたのだと、もう、どうにもしようのない侘(わび)しさを、嚙(か)んでいる。

「二銭団洲だって、歌舞伎座を踏んだのにな。」

台助は、はずみで、そんなことを言ってしまってから、しまったと思った。九女八が苦(にが)い顔をしたからだった。二銭団洲とは、下谷の柳盛座(りゅうせいざ)で、二銭の木戸銭で見せていた、阪東又三郎が、めっかちではあるが団十郎を真似て、一生の望みが叶(かな)って、歌舞伎座の夏休みのあきを借りて乗り出したことがあったのを、い

かもの食いの見物が、つねづね噂（うわさ）に聞いた二銭団洲を見にいった。出しものは「酒井の太鼓」だったが、あとで座付き役者から物議が起ったことがあったりした、九女八にはいやな、ききたくないことなのだ。

「仕方がないよ、あたしは、はじめっから小芝居へ出てたものね。女役者なんて、あたしたちから出来たのだもの。」

九女八は、老（おい）ても色の白い、柔らかい足を出している、台助の足の小指に触（さわ）って見た。

台助は、艶々（つやつや）とした、額から抜け上っている頭の禿（はげ）かたも、柔和な、品の悪くない、いかにも以前（もと）は大問

屋の旦那であったというふうな、鷹揚(おうよう)さと、のんびりした耳朶(みみたぶ)とを持っている、どこか好色そうな老爺(としより)だった。

「大阪の千日前(せんにちまえ)へ芦辺倶楽部(あしべクラブ)というのが出来るそうで、師匠が出てくれるならば、月額千円は出すというのだそうだ。」

九女八は、考え、考え、台助の小指をいじりながら、

「見世物小屋ではないでしょうかねえ。でも、お金が溜(たま)れば、も一度、何か、やって見る事も出来るでしょうから――」

「一年十二ヶ月、頭から約束しようというのだが――

痛(いて)えよう。」

と、台助は足をひっこめた。

「そりゃそうと、繁(しげ)の井(い)を久しくやらないね。」

「染分手綱(そめわけたづな)ですか——繁の井をすると、思い出すものね。」

弟子分(でしぶん)だった沢村紀久八(さわむらきくはち)が、お乳(ち)の人(ひと)繁の井をしていて、じねんじょの三吉との子別れに、あんまりよく似ている身の上につまされ、役と自分とのわけめがつかなくなって、舞台で気の狂ってしまったことを思い出すからだった。

しかも、その、女役者紀久八は小説にもなり狂言に

もなっている。佐藤紅緑(こうろく)氏の「侠艶録(きょうえんろく)」の力枝(りきえ)という女役者は、舞台で気の狂った紀久八がモデルであった。小栗風葉(おぐりふうよう)だったかのに、「鬘下地(かつらしたじ)」というのがある。

「紀久八は舞台で気狂いになったが——あたしは舞台で死ねれば本望だ。なあに、小芝居だって見世物小屋だって、お客さまはみんな眼玉をもってらっしゃる。どんな人が見てくださってるかわかりゃしない。」

「じゃあ、まあ、とにかく、大阪の方の話は、出来そうな工合に、返事をしといてもいいね。」

——これは、もちっと後(あと)のことで、九女八はこの大阪から帰ってから後、大正二年の七月に、浅草公園の

活動劇場みくに座で、一日三回興業に、山姥や保名を踊り、楽屋で衣裳を脱ごうとしかけて卒倒し、そのままになってしまったのだった。大阪で溜て来た金は、九女八が、何か計画して考えていたことには用いられず、終焉の用意となってしまったのだが、台助は、そんな予感がしたのかどうか、ふいと、仕かけていたその談話を打ち切って、

「俺は、ちょいとその事で、出かけてくる。」

と着更をしかけたところへ、静枝が名刺を読みながら来て、

「お師匠さんの芸談を聴きに来た、演芸の方の記者ら

しいのですよ。談話（はなし）といてくだすった方が好いと思いますから、お逢いになってくださいな。」

と、婉曲（えんきょく）に、この名人の真相を残させたい、弟子の心やりですすめた。

「じゃあ、茶室へでもお通ししといておくんなさい。」

と九女八が言っているうちに、台助は玄関で、来訪者と摺（す）れちがいに、傘をさして、門の外へ出ていった。

「おや、お出かけですか。」

と、台助に声をかけたのは、通りかかった芝居道に通じている、芸人の間を歩き廻る顔の広い男だった。その男は、九女八の家（うち）の門口で、顔馴染（かおなじみ）の台助に逢うと、

いま聞いてきたばかりの、煙（けむ）の出るような噂がしたくてたまらなくなったように、

「そういえば、御存じだろうが、あっしゃあ今聞いたばかりのホヤホヤなんだ。話は古いことだが、お宅の師匠は、以前（もと）、堀越（ほりこし）から、なんという名をおもらいなすってた。」

「升之丞ですよ。」

「そうだってねえ、守住さん。それについちゃあ、面白い話があるんだ、何時（いつ）、九女八とおなんなすった。」

「さあ、たしか、新富町（しんとみちょう）の市川左団次（たかしまや）さんが、謝（わび）に連れてってくだすって、帰参（きさん）が叶（かな）ったんですが——あ

りゃあ、廿七、八年ごろだったかな。」
「そこなんだよ守住さん、御勘気に触れて破門された時に、師範状を取上げに行ったのは、談州楼燕枝（だんしゅうろうえんし）(落語家（はなしか）)だったってね。それがね、宗家（そうけ）へおさめねえうちに、その師範状をなくしちゃったんだとさ、すっかり忘れてると、急に帰参が叶ったので、奴（やっこ）さん弱ったのなんのって、でね、九代目の女弟子で、もとが岩井粂八だから、粂の字を九（く）の字と女（め）の字にした方がいいって、こじつけちゃったんだそうだが——滑稽（こっけい）さね。」
「へえ、そんなことがありましたんですかねえ。」

台助は、傘を打つ雨を見上げた。上層（そこ）は晴れているのか、うす鼠（ねずみ）色の雲からこぼれてくる雨は白く光っている。

「ねえ、お前さん、この雨の工合は、九女八（うち）の芸のような——地震加藤とか光秀（みつひで）をやる時の——底光りがしてるじゃねえか。木下尚江（きのしたしょうこう）さんという先生は、日本にすぐれた女性が三人ある、畏（おそ）れ多いが神功（じんぐう）皇后様を始め奉り、紫式部、それから九女八だと仰しゃったそうだが——」

と、たいして親しくもない男へも言いかけたい気がした。

家（うち）では九女八が、訪問者へ、こんなふうな懐古談をしているときだった。

「母が再縁いたしますと、養父が自儘（じまま）な町住居（ずまい）をしているような、道楽者の武家でして、私は十六の年、小石川水道町で踊の師匠をはじめました。ええ、私がごく小さい時分に、両国におででこ芝居がございましたのと、妥女（うねめ）が原（はら）に小三（こさん）という三人姉妹の芝居があり、も一つ、鈴之助というのがあっただけで、これらは葭簀（よしず）張（ば）りの小屋でございますから、まあ私どもが、芝居小屋でやりました女役者のはじめのようなもので——初開場？　薩摩座（さつまざ）の出勤には、政岡と仁木。その次

が由良之助でございました。」

語りさして、彼女もふと、白い雨のこぼれてくる、空を見上げていた。

底本：「新編　近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店
　　　1985（昭和60）年12月16日第1刷発行
　　　1993（平成5）年8月18日第4刷発行
底本の親本：「春帯記」岡倉書房
　　　1937（昭和12）年10月発行
初出：「東京朝日新聞」
　　　1937（昭和12）年6月23～29日
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：門田裕志
校正：noriko saito

２００７年４月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。